

1 研究の内容

(1) 全体研究テーマ『学びをあむ』と教科の学びの関連について

今年度、体育部としては全体テーマを受け、特にからだを通して関わり（対話）から子どもたちが主体的に学びを広げる姿を具体的に捉えようと試みてきた。

これは、体育における“てつがくすること”として考え続けてきた「自分のからだと向き合い、からだを通して考え続けること。実際に“やってみて”“感じて”様々な対象（自己—他者—モノ）と対話し、運動のおもしろさや魅力に触れたり、健康へ興味関心を寄せたりすることで、問いをもって活動し、動きや自分のからだ・生活などを変化させていくこと」の対話部分により重点を置こうとするものである。

これまでもからだを通しての関わり（対話）には着目してきたが、その中でお互いを高めあう子どもの姿を探るとともに、そのような場を作る授業のあり方についても、より実践を深めようと考えている。

(2) 今年度の研究について

今年度はからだを通して考えることに加え、「対話」としてより関わりに重きを置き、特に相手（人）との関係の中で生まれる子どもたちの動きや考え方の変化を見ていきたい。全体提案の重点課題(p)にもあるように、“自ら学びを構想し、他者と関わりながら主体的に探究”する姿～体育では特にからだを通して自分の感覚を相手に伝えたり、相手の動きを受けいれたりすること～つまり、からだで関わりあう共通体験が、他の教科にも通じる経験になると考え実践に取り組んでいる。

一方、そのための教師による子どもたちの動きの見とりと働きかけの大切さ、つまり教師の役割についての課題も浮かび上がってきており、検討を続けている。

保健学習としては、正しい知識を元に健康に向き合う力をどう育むかも考えている。今日的課題として、個人の健康と集団の健康、正しい情報を健康な生活に生かすリテラシーなども挙げられる。保健に関わる原則や概念を根拠としたり活用したりして、情報を選択し、課題解決に主体的に取り組むことができるように実践を重ねていきたい。

(3) 研究の視点として

① 関わり合いの中で教師は何をどう見とるのか ～からだや動きを中心として

子どもたちが思い切りからだを動かしたときの感覚や快さを感じる場面、仲間との本気の関わり合いの場面が減ってきているように感じている。頭だけで考えても、実際にうまく動けないという体験を教師がどう見とり、どう問いとして子どもたちの学びにしていけるのか具体的に考えたい。

② シンプルな環境設定とは ～その中での教師の役割は

これまでにもシンプルな環境設定と、その中での子どもの動きやからだの変化に着目してきた。同じ動きに取り組んでも、子どもたちそれぞれの多様性や創造性が育まれる場面も見られている。ただ、何をシンプルと捉えるかは対象の子どもたちにもよるが、教師の考え方も様々である。

どのような環境設定で動きを通して子どもの問いが生まれるのか、一方、子どもたちに伝えるべきことは何か、気づきをどう促すのか。安全性の確保とともに、子どもを引っ張る段階、教える段階、見守る段階など子どもの活動に応じて、見通しをもち関わりながら共に学習を作っていく必要性について実践を通して検討する。

③ 実感を通して学んで行く保健学習

様々な健康関係の情報があふれている今、どういう基準で何を自分のために選び取るのか、そのために必要なことは何か。知識だけでなくからだの感覚を通して生きた学びの場を作っていく試みを、発達や体験に応じて実践していく。

2 授業実践から見た子どもたちの学ぶ姿

(1) 3年生「他者との関わりの中で〈動き〉を深める」〈関わりあうからだ〉

① 子どもたちの日々の様子

「次の時間は体育！」となると、すごいスピードで着替え猛ダッシュで校庭へ。「走ってきていい？」
「もうなわとびやっっていい？」など、授業の始まる前からすでに汗をかいている子どもたちが大勢いる。
子どもたちがとくに好きなのが鬼ごっこである。自分の体がどのように動くとぶつからずにタッチできるか、友達と協力して捕まえるにはどんな作戦が良いのかなど工夫し学んでいる。意欲的に活動する子どもたちの姿を見ると「体育をさらに好きになるように」という思いも強まり、子どもたちにとってより実りある体育をと模索しながら取り組んでいる。

② ボールを使って

授業では、様々な場面で他者との関わりを深めることを意識してきた。会話だけでなく、からだを用いて、その中で他者とどう関わるのか、あるいは自分自身がどう働きかけることで他者にどのような変化が起こるのか、からだで感じ取ることができる機会を増やしてきたのである。

今回、ボールを使った授業を行った。子どもたちはボールを持つだけで嬉しくなり体を自由にどんどん動かしている。ただ、他者と一緒に活動することに関してはあまり得意ではなく、一人でボールを投げたり、仲良し同士で投げあいをするだけという場面もあった。そこで「みんなでボールを落とさない」という課題を出し、一人一つボールを持ち、ファミリー(3人～4人の生活班)で協力してボールをパスすることを促した。その際、①みんなで声を出して合わせる②一緒にタイミングでパスすることは提示した。子どもたちは「こう投げよう」とファミリーで話し合いながら投げ方を工夫したり、「せーの！」と声を合わせて協力して取んだりしていた。次の段階では、「ボールをとられない」という課題で、ファミリーで一つのボールをパスしながら違うファミリーにボールをとられないように動くことを行った。ただこの活動では力の差が出てしまい、ボールをずっと持っている子がいたり、ボールをとられてしまった子が泣いてしまったりということがあった。この活動を行う際に子どもたちに提示したことは①2秒以上ボールを持たない



②足を動かす③味方にパスする、である。子どもたちは自ら工夫して、ボールを渡すときに相手のことを考え、優しくパスしてキャッチしやすいようにしたり、その子に合わせてどのようなパスをしたらとれるか、どうやったらもっと楽しくできるかを考えて行動していた。しかし、子どもたちにしっかりとルールを理解させないまま授業を進めてしまったこと、提示内容不足により子どもたちが協力

する場면을効果的に作ることができなかったこと、学びを深める時間を十分に設けられなかったことは反省として挙げられる。教師の声掛けと働き掛けがとても重要であると実感した授業であった。ただ、自分たちで考えどのように動いたら自分も相手も楽しめるのかなど、からだを通しての関わり合いが生まれた瞬間だったのではないだろうか。教師として、教材をどのように使い、授業の構成をしていくのか、活動している中で子どもたちに寄り添いつつ進めることをめざし、「一人ではなく、みんなで活動するからこそ楽しい、ゆえにもっと動きたくなる」ということがより伝わる授業を展開していきたい。

(2) 6年生「自分たちでやってみたい遊びを創って探究する」〈気づくからだ〉

2学期に、これまでやってきた体育を回想したうえで、小学生のうちに達成したいこと、やっておきたいことなど、自分の探究したいことを決めて取り組んでみようという時間を用意した。教師の思いとしては、「学びをあむ」との関連において、6年生になったら自分の学びの時間を自分の成長のために使うために、これまでの運動・スポーツとのかかわりにおける自己評価を踏まえながら自分で見通しをもって計画を立てて活動し、自分の成長を自分で実感できるプロジェクトとして、遊びを創って探究してほしいと考えていた。

単元の初めに、学級の子どもたちを集めて、これまでの体育で取り組んだことや、自分が夢中になった経験、課題だと感じて心残りだったという経験などを自由に語り合った。それを生かして、まずは、各々で自分の探究してみたいことをやってみることにした。その中で、数名がマットの上でたくさん回転することがおもしろいと言い出し、マットを並べて、連続して前転をしたり、丸太のように横転がりをして遊んでいた。それをみて集まってきた人たちが、チャレンジしては眩暈で立てなくなることや回転し続けた後に眩暈で思うように走れないことをおもしろがっていたが、Z児は、たくさん回転しても眩暈を起こすこともなく、周囲の人たちからの関心を集めた。

眩暈を起こさないのであれば、その力を何か使ってできないかとZ児と友達数名で話し合ったところ、「回転をして速く移動することを目指してみてもは」という案が出され、いろいろ試した結果、「ZM3」というスポーツが完成した。「ZM3」は、以下のような設定となった。

- ・ロングマットを3枚つなげて並べ、その続きにゴールのマットを置く。
- ・スタートの合図で、連続で前転をしてゴールを目指す。ゴールまでの前転の回数は自由。
- ・ゴールのマットに足の裏が着いたところでゴール。スタートからゴールのタイムを計測する。

Z児を含むこのスポーツを開発した数名は、早速、記録更新に向けて挑戦を始めた。子どもたちは、とにかく速く回ることがゴールに素早くたどり着く方法だと感じたようで、初めは体をできるだけ小さく丸めて、小さく素早く回転することで、自分自身のタイムを短縮することを目指していた。しかし、小さく素早い回転を続けると、足での跳躍や腰角を生かした前への推進力が出されない。始めのうちはそのことには気が付かず、いかに小さく速く回転するかを検討していたため、編み出された方法が写真1のような手の推進力を使った前転であった。Z児は、小さな回転の時でも前への推進力を生み出そうとして、手の平を自然とおろしてマットに手を着くのではなく、着手する瞬間に手の向きを180°回転させて着手し、回転の終盤になったら着手した手で後ろから体を前に押し出すように回転スピードを上げるという方法を思いつき、実践し始めた。この着手の方が、次の回転を始めたときも、滑らかに接続できると考えたのだろう。この方法を善しとした地点で、その後もひたすらタイムを短縮するために、果敢に挑戦を続けるが、タイムの伸びが停滞し始めた。

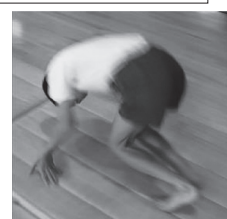


写真1

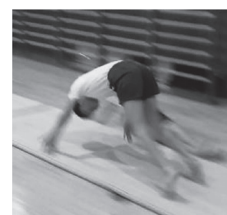


写真2

これ以上は伸びないだろうと気が付いたのか、Z児は、何か別の手段を使って、タイムを伸ばそうとさらにZM3の活動にのめり込んでいった。「みんなが5回で回っているのをみて、自分も5回を目指そうと前へ前へと回っていたら、自然とこうなった」と言っていたが、Z児(写真2)は、跳び前転のような前転に変化し始め、最初はロングマット3を6~8回転ほどしていた前転を4回転に減らし、最終的には1秒以内に1回転のスピードで回転してゴールするタイムにまで自分を成長させていった。まとめの段階でも、さらにタイムを縮めようと、ビデオで自分自身の回転を撮影し、ゴールのマットに無駄なくたどり着くための回転の大きさを調整する取り組みを夢中になって取り組んだ。

このZ児の取り組みや「ZM3」は、映像に残して共有していたためか、他の学級にも影響を与え、Z児を真似て、最速記録を出そうという活動が広がっていった。全ての人にとってすぐに馴染むスポーツとは言い難いが、活動としてのおもしろさやZ児の取り組みの魅力が伝播していったといえるだろう。

(3) 6年生(保健)「正しい健康情報を見きわめるための方法を知ろう」<実感するからだ>

① 健康を自分で決める力を育むために

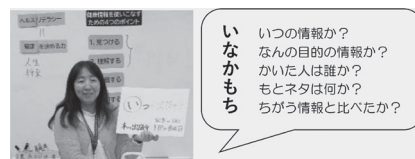
インターネットやSNSが普及し、健康や病気に関する様々な情報は溢れるほどにあり、自分にとって必要な信頼できる情報かどうかをきちんと判断することは大人でも難しい。健康のために、自分に必要な情報を適切に選び、よりよい意思決定ができる認知的・社会的スキル、つまりヘルスリテラシーを子どもの頃から積み重ね、身に付けていくことが大切である。しかし、情報を活用する以前に、信頼できる情報にアクセスして選び取る力がなければ、ヘルスリテラシーは発揮できない。そこで、まずは正しい健康情報を見極める方法とその必要性を理解することが重要ではないかと考え、実践を行った。

② 授業の実際と振り返り

前時で行った病気の起こり方（病原体、体の抵抗力、生活行動、環境が関わり合って起こる）に、流行しているインフルエンザを当てはめて考え、予防方法について知っている知識や情報を出し合った。手洗い、規則正しい生活習慣、加湿器、予防接種といった基本的な知識をはじめ、乳酸菌飲料やココアを飲む、はちみつやれんこん、きのこ類を食べる、二酸化塩素による空間除菌をするなどの様々な情報が挙げられた。「それはどこで聞いた情報？」という教師の問いに対し、「テレビで言っていた」「小学生新聞で見た」「お母さんから聞いた」「コマーシャルで見た」といった答えだった。それらの情報について、自ら主体的に調べたり、根拠をつき詰めて考えたりしたことはないことがわかった。

次に、テレビの情報番組で紹介された実際の画面を示し、「レモンティーを飲むとインフルエンザが予防できるってテレビで見たんだけどね、お茶小でもやってみようと思うんだけど、どうかな？」と子どもたちに投げかけてみた。子どもたちからは、即座に「いいね！やろう、やろう！実験しよう！」という肯定的な意見や反応が多く出た。すると、A児が「ほらね、江部先生みたいな人がいるから、テレビにだまされてすぐ飛びつくんだよ。」と言った。それに対して、ほとんどの子どもは、きょとんとした表情で、「え？どうして？レモンティーが飲めるんだよ。」という反応だった。教師が「Aくんは、どうしてそう思ったの？」と問い返したところ、A児は、「だってさ、『期待』とか、『無力化！？』の後の『？』とか、見るからに怪しいよ。」と答えた。その意見に、他の子どもたちは、ハッとした表情になり、「99.99%なら0.01%はどうなったのか」「実験ってどんな実験なのか」「その研究所は本当にあるのか」「〇〇特別研究員って、いったい何者なの？」「よく見たら、インフルエンザ患者が飲むって書いてある。そもそも、それって予防といえるの？」などの意見が出た。4学級で同じ内容の授業を行ったが、A児のように批判的な視点で情報を見て、すぐに意見を述べた子どもはごくわずかであり、子どもたちのヘルスリテラシーの実態を痛感した。

さらに、専門的な立場である学校司書から説明を聞く時間を設け、見つけた情報が信頼できるかを確認するためのキーワード「い・な・か・も・ち」^{※)}について学んだ。そして、気になる健康に関するニュースや記事を1つ取り上げて、「い・な・か・も・ち」を参考にしながら、ニュースや記事に関する自分の考えを述べさせる宿題を出した。時期的にインフルエンザに関する情報を取り上げた子どもが多かったが、批判的な視点で分析できた児童は少なく、「企業のホームページなのでデータも説得力があり、大丈夫」「医師が言っているから安心」「新聞に書いてあったから（公共の放送局だから）信頼できる」などの記述からも、子どもたちの情報の見方は、まだ不十分で課題が残った。



しかし、宿題を通して、「情報は私たちにとってとても重要な役割がある。それを正しく見分けながら上手に使わなければならないと思った」「効果をほめて商品を売ろうとしているかどうか注意して見て、そうでない科学的なデータや数字がきちんと載っている記事を見るようにしたい」「効果が大きさに書いてあったり、100%治るといようなことが書いてあっても自分で十分に根拠を調べてしん重に選ぶことが大切だと思った」「いなかもちを使って調べたら安心感があつた。マイプロジェクトでも利用し、正確な情報を得て、みんなに伝えたい」「情報が本当か疑う視点をもつことの大切さを知った」「正しい情報を読み取ることの難しさを実感した」のような振り返りの記述もあり、情報を鵜呑みにせず、見ることの視点と大切さを学んだようである。この授業をふまえて、次時以降の学習につなげ、子どもたちにヘルスリテラシーを高めるための実践を重ねていきたい（本要項 p.135 参照）。

※) 聖路加国際大学のヘルスリテラシーを研究するプロジェクトチームが提唱している、情報を見極める際の5つのキーワードで、それぞれの頭文字をとった語呂合わせ

3 今後に向けて

関わりの中での子どもたちの動きやからだ、学びの変化について教師の役割も検討しながら実践を続けてきた。子どもの体験から興味を引き出すこと、振り返りによりからだの動きを通した体験を経験にすることなど学習段階に応じた対応と教師の役割をさらに考えていきたい。（江部・神谷・栗原・後藤）